「せこい」考
――徳島方言を中心に――

仙波光明

0. はじめに

「せこい」について整理しておきたい。というより、「せこい」の語源と、意味の派生のしかたについて考えてみたい。ここで主たる検討の対象とするのは、徳島方言の「せこい」である。つまり、激しい運動をしたあと、息を切らしながら口にする類の「せこい」である。

「せこい」は、その通用の範囲を手がかりとして三つに分けて考えるのが便利だと思われる。

(1) 方言として生きてきた「せこい」である。これは、「苦しい」「忙しい」という意味を持つ。

(2) 俗語として認知されるようになり、一般の国語辞典に収められるようになった「せこい」である。これは、「悪い、下手だ」「みみっちい」といった意味を持つ。役者や芸人仲間の隠語から広がったと考えられている。

(3) 犯罪者集団の隠語として存在し、一般的には隠語辞典の中でしか出会わない「せこい」である。「ずるい、素早い、汚い、困難だ」のような意味を持つ。意味の面からは(1)(2)につながる。

これらの「せこい」を検討の対象にした論考は、管見のおよぶところ、まだないように思う。(1)は、四国にほぼ限定される方言であること、また(2)(3)は、俗語・隠語の類であるところから、まともに取り上げられることがなかったのであろう。日本語の歴史の中に於いて、比較的新しく生まれたかに思われるこの言葉には、十分な文献資料、または方言の分布が見られないことも、検討対象となりにくい要因かもしれない。あるいは、一編の論文を用意するまでもなく、その語源は簡単に推定できるものであったのか(注1)。

それはともかくとして、四国地方での「せこい」の意味を比較してみれば、そこに「何らかの点で余裕がないさま」という共通の要素を引き出すことは容易である。おそらくそれは、「狭い場所」を意味する「せこ」にたどり着くことができるであろう。ついで

「堰」「咳く」「急く」と共通の要素「せ（狭）」を認められよう。俗語・隠語の「せこい」については、別の機会に考えることにしたい。

1　方言「せこい」の現在

1 1　はじめに徳島方言の「せこい」が現在どのような状況かについて簡単に確認しておきたい。徳島方言の範囲内で使われる「せこい」は、「精神的・肉体的に苦しいさま」の場合がほとんどのようである。そして、これは、徳島方言「せこい」の中心的な意味として、徳島県で作成された数々の方言集には必ず記載されてきた（注2）。かつては、四国各県および淡路島でも使われていた意味であるが、現在ではほぼ香川と徳島県に限られつつあるかの印象がある。なお、この意味では「えらい」や「しんどい／しんだい」も多く使われる。若い世代の中には、「けちくさい、みみっちい」の場合も広がりつつあるようだが、まだ強い勢力は持たない（注3）。

徳島新聞の投書欄（注4）からは、次のような例が見つかる。ここでは程度の差はあるものの、肉体的に苦しいさまを表すものがほとんどである。「みみっちい」の例も1例だけ（⑥）見つかったが、それは括弧付きで表記されている。

① 痛くはない。が、何とも言えない複雑な気持ちだ。あえて言えば、せこい、とでも言えば少しは表現できる。とにかくいい気持ちではない。おなかが膨らみ、棒のようなものがぐりぐりと突き上げてくる。（話98年3月5日）

② （病院の待合室で）いつもは早う呼んでくれるのに、今日はなかなか呼んでくれん。せこいけん来たのに。（紙00年1月15日）

③ せこうない程度に動いて、お姉さんに嫌われんようにな（話97年12月20日）

④ 最後まで踊り切った息子の顔からも腕からも、汗が噴き出している。「せこうなかったかしら」と心配顔の私をよそに、……（話97年9月3日）

⑤ 息子はぜんそくで、運動らしいものはほとんどしていない。……「せこかったらやめとき。……」（話97年9月3日）

⑥ 帰りの車の中、あんなすばらしい美術館建てるのにどのくらいの費用がかかったんだろう、なんて「せこい」話をしながら……。（話99年4月26日）

2　徳島と香川の「せこい」

2 1　徳島方言の「せこい」（1）

徳島方言の「せこい」を考察するにあたって、『阿波言葉の辞典』（以後、『阿波』と記す）の記述をまず検討してみよう。この辞典は、「せこい」に対してもっとも多くの意味を記述しているものである。アクセント注記を省略して、「せこい」の項を引用する。

「せこい」

【形】① 疲れたさま　今日ノ帰リハ向イ風デセコカッタ。

② つまらぬ、徒労のさま　一日中カカッテ一枚モ売レ

ンノデセコカッタ

③ 馬鹿をみたさま　一寸チガイデ二等トハセコイヤツジャ

④ 息苦しいさま　イキガセコイ

⑤ 辛抱ならぬさま　二年浪人ハセコイノー

⑥ 芸能界などで伴奏が悪いために歌いにくいとき

このうち①と④とは、ともに「肉体的に苦しいさま」として一つにまとめることができる。また②③は、「努力が報われなかった結果に対する評価」とまとめることができよう。これは、シンドイ・シンダイが肉体的疲労を表し、精神的疲労に対しても使われ、さらに「つまらない」の意味を持つに至っていることと併行する現象ととらえられる。

『阿波』では、「精神的に苦しいさま」の意味を明確に示しているとは言い難いようでもあるが、②③の意味が生まれる前段階として、精神的苦痛・疲労を表す意味があったはずである。それを⑤から推測できるであろう。⑤の意味は、経済的に許しておくことができないということかもしれないが、それとともに精神的苦痛の意をも含むであろう。

⑥については、隠語としての「せこい」として後に簡単にふれるにとどめることとし、この稿では詳しい検討の対象から外しておく。

『阿波』に示された①～⑤の記述から、「せこい」は「肉体的（および精神的）苦痛または疲労のさま」を基本の意味とすると捉えることができよう。

なお、『阿波』では、「せこためる」に対して「心労、筋骨の労両方ともいう」と述べているが、これは、「「せこためる」＝「せこい」目に遭わせる」という理解であろうか（注5）。

2.2 徳島方言の「せこい」（2）

「せこい」に対する、右のような把握は、『徳島の方言』に示されているところでもある。ここでもアクセント注記を除いて『徳島の方言』の記述を左に示す。

セコイ　肉体的・精神的に苦しい。①負担が重すぎる。②息が苦しい。③腹などが痛い。クワルとも言う。④生活が苦しい（香川県西讃～愛媛県東予・中予も同じ　香川県・愛媛県南予ではずるい意。関東では、みみっちい・規模が小さいなどの意。エライ・シンダイ・ズツナイ・ツライ参照）

また、『徳島県のことば』でも次のように整理してある。（ここでもアクセント注記は割愛する）

セコイ《形》①激しい運動をして息が苦しい。サカガ　キツーテ　セコカッタ（坂が急で苦しかった）。②病気で気分が悪い。ジュギョーチューニ　セコーナッテ　ホケンシツエ　イタ（授業中に苦しくなって保健室へ行った）。③仕事などで物理的心理的に負担が重すぎる状態。シトリデ　セーチューテモ　セコイワ（一人でしろと言っても負

担が重すぎるよ)。〈金沢〉

徳島方言の「せこい」の意味は、以上のようなものである。数多くの方言集の中には、ただ「苦しい」とのみ記したものも少なくない。

2 3 香川方言の「せこい」を手がかりに

さて、徳島方言に現れる意味の範囲内だけで、その語源を推定するにはいささか困難を感じないわけには行かないのだが、香川方言での「せこい」を見ると、そこに大きなヒントがあることに気づく。

『日本方言大辞典』から、香川方言で使われている意味を抜き出すと、

① 畑仕事などが難儀だ。苦しい。つらい。
③ 生活が苦しい
⑥ 忙しい。
⑧ 間隔が狭い。(小豆島)

となる。言うまでもなく、①③は徳島方言と共通であり、⑥⑧が香川方言独自の意味のようである。さらに、『坂出の方言』を見ると、「せこい」は次のように説明されている。

(1) きゅうくつで苦しい思い。 「両者の板挟みになって——思いをする」「義理の中だけに——思いをする」
(2) 間隔が狭い。不自由な。細々とした。 「三十センチおきでは——から少し拡げよ」「アパートの一室では——」
(3) ふところ具合が悪い。 「株に失敗して近頃——ことだ」「——生活には慣れている」

この記述から、「せこい」の意味を「物理的、精神的、経済的に余裕のない状態」、つまり何らかの点で「余裕のない状態」であると整理することは、決して無理な推論ではないだろう。

この推論が認められるならば、さまざまな「せこい」について、「余裕のない状態、ゆとりのないさま」を出発点に解き明かしてゆけるであろうが、次の項で、しばらくセコについて検討してみたい。

3 「せこい」の語源は「せこ」(狭い場所)か

3 1 「せこ」の意味

「せこい」という形容詞の語幹は「せこ」であるから、前項の結論と矛盾しないと考えられる「せこ」を捜してみると、「小路」を意味する「せこ」が有力な候補としてあがってくる。(もちろん「勢子」ではないだろう。)

そこで、地形や土地利用状況の特徴を示す「せこ」、および「せこ」を構成要素に持つ語を『日本国語大辞典』および『日本方言大辞典』(「さこ」の項)によって拾い出してみると次のようになる。(丸数字は『日本方言大辞典』のまま。)なお、この項では意味のみを検討対照とし分布については後で扱うこととする。

①山と山との間のくぼみ。谷。《せこ》和歌山県、日高郡、

愛媛県、高知県、鹿児島県

③側稜（そくりょう）と側稜の間の沢。山言葉。《せこ》

滋賀県高島郡

⑭両側から家が迫っている所。小路。横町。《せこ》勢州※、茨城県東南部、岐阜県大垣市、愛知県北設楽郡、豊橋市、三重県、和歌山県東牟婁郡、新宮、愛媛県［文献例］随筆・羇旅漫録-下・一二九『山田にては横町を世古（せこ）といふ。今も大世古堤世古などいふ名目あり」《せこみち［―道］》茨城県、埼玉県秩父郡、愛知県愛知郡、碧海郡

⑮田畑の小道。《せこみち》長野県佐久

⑯敷の入り口。門先+《せこ》岐阜県山県郡、稲葉郡

⑰狭い所。《せこんど［―処］》奈良県宇陀郡

⑱町村の一区画。字（あざ）。《せこ》愛知県日間賀島

過去の文献資料には、『物類称呼』等を除いて、あまりその例を見いだせないように見られる「せこ」であるが、方言の中には、このように各地に様々な「せこ」が残されている。いずれも、「狭い場所」を示していると抽象できよう。となれば、「せこ」は、「セ（狭い）＋コ（場所）」という構成による名詞ということになる。

3 2　「せこい」の意味の展開

この、「狭い場所」を表す「せこ」が形容詞化して「狭い状態」すなわち「空間的にゆとりや余裕のない状態」を指すに至ったのが、『坂出の方言』（以下、『坂出』と記す）に挙げられている「間隔が狭い」であろう。

「せこい」が、いったんこのような意味を獲得してしまうと、それがいろいろな余裕のない状態を表す場合に用いられるようになるのだと考えられないだろうか。

狭い空間に閉じこめられざるを得ない、余裕のない状態（『坂出』の2）は、まもなくそのような状態を引き起こす経済的な余裕のなさ（『坂出』の3）をも表すに至るであろう。『阿波』の⑤「二年浪人ハセコイ」もこの状態と考えられなくもない。

精神的に余裕のない状態、あるいはそこまで追い込まれることはなくとも、窮屈に感じられる状態、または負担に感じる状態をも表すようになったと言えよう。それが、『坂出』の1であろうし、徳島方言で現れる「気がせこい」という表現であろう。このような感情をもたらす事態が過去のことになったとき、場合によっては徒労感が残される。そのような状態での「せこい」が、『阿波』の②「つまらぬ、徒労のさま」であり③「馬鹿をみたさま」であると考えられる。

そして肉体的に余裕のない状態が、『阿波』の①「疲れたさま」や④「息苦しいさま」ということになる。方言としてのもっとも古い記録があるのは、この意味である。

香川方言には、さらに「忙しい」という意味がある。これも、時間的に余裕を持てない状態、と説明できるだろう。

少々冗談めかしたまとめ方をしてみると、狭いすまいで暮らさねばならないほど経済的にゆとりのない状態で、精神的に窮屈な思いをしながら、それをどうにかしようと忙しい思いをして息せき切るような仕事をしながら、無理がこたえて病気で「せこい」

ということになる。（41「せこせこびんぼう」参照）

4　「せこい」の周辺

41　「せこせこ」、「せこつく」

忙しいという意味が、香川方言の「せこい」にはあった。そこであらためて「せこ」を構成要素に持つ語を『日本方言大辞典』からさがしてみると、「せこせこ」、「せこつく」、「せこめる」等が見つかる。

せこせこ

① あくせくするさま。忙しく落ち着かないさま。
千葉県山武郡、東京都八王子市、新潟県佐渡、長野県上田

② 急いでいるさま。また、疲れているさま。また、空腹なさま。岩手県気仙郡

せこせこびんぼう

あくせく働きながらも貧乏する人。
新潟県佐渡「せこせこ貧乏のっとり果報（諺）」

せこつく

こせこせする。あくせくする。
青森県南部、新潟県佐渡、長野県南部

これらのうち、「せこせこ」や「せこせこびんぼう」は、徳島や香川の方言の「せこい」と同様の意味を持っていると言えよう。四国などでは形容詞化したのに対して、中部日本から東では副詞化している。

「せこい」という言葉は、文献資料から確認できる範囲では、それほど昔にさかのぼることはできないようであるが、この分布状況を見ると、意外に古くからあったのかもしれない。

また、「せこつく」をみると、「けちくさい・みみっちい」等につながるのかもしれないと思わせられる。同時に、「こせこせ」との関連（「こせ」は「せこ」の転倒形でもあろうか？）も気になるところではあるが、いまはよく分からない。

42　「せこめる」

「いじめる。責める。問いつめる」の意の「せこめる」は、一見「せこい」とは無関係のように見える。しかし、『時代別国語大辞典』（室町時代編）が示すように「人を、逃げ場のない状況に追いつめる。」と理解するならば、これも「せこい」と語根を共有すると見られないであろうか。人を、狭い場所に追いつめることが「せこめる」の基本の意味であったとすることは、決して不都合ではないだろう。

ただし、『日本国語大辞典』が引く『名語記』には「せごむ」と二拍目が濁音の形になっていることを重視すれば、「セ＋コム」と言う語構成を検討しなければならないだろう。しかし、『小学館古語大辞典』や『角川古語大辞典』が『名語記』を引いていないことを考えると、その評価に疑問があるのかもしれない。

なお、『小学館古語大辞典』は、セコムについて「「せ（責）む」と「こ（込）む」とが混合した語か」としていて、『名語記』の「人をせごむといへる詞、如何。答、せめくほますの反」が影響して

いるようにも見えるが、はたしてどうであろうか。

「せこめる」は、尾張一宮、福井県遠敷郡、岐阜県飛騨、兵庫県淡路島、和歌山県西牟婁郡、岡山県苫田郡に分布し、同じ意味の「せこためる」は、西日本に広がっていたらしく、肥後、島根県簸川郡・出雲市、徳島県、長崎県対馬に記録されている。「せこめる」が京都を中心として東西に広がりを見せるのに対して、「せこためる」は西日本に限定されるが、「せこめる」より遠くに広がっている。

5　いろいろな「せこ～」の地理的重なり

5 1　地名の「せこ」の分布

現在は、ほぼ徳島と香川に限定されるかに見える方言の「せこい」であるが、同じ「せこ」を語根に持つと思われる語は、意外な広がりを以て分布しているように見える。

これらの「せこ～」が「狭い場所」を意味する「せこ」から生まれてきたものとすると、この「せこ」と、さらには地名として残されている「せこ」の分布との間に何らかの関連が認められないかを検討しておくことは、無意味ではないであろう。

「せこ（瀬古、世古、迫など）」をその構成要素に持つ地名の分布をCD－ROM版『日本地名索引』を用いて検索してみると、六五件が得られる（注6）。

茨城県1（瀬古）、千葉県5（中瀬古、広瀬古等）、静岡県4（瀬古、世古之滝等）、愛知県9（外瀬古、中瀬古等）、岐阜県三（大瀬古等）、三重県七（宇治世古、世古地等）、岡山県1（鍛冶屋迫）、広島県1（船迫埠）、高知県1（瀬古井）、福岡県1（大瀬子）、大分県2（瀬古、片瀬古）、長崎県1（瀬古）、熊本県2（曲迫、瀬子浦）、宮崎県1（熊迫川）、鹿児島県5（迫田、桑之迫等。うち須古は奄美大島）

本来ならば小字地名までを対照とすべきであり、右の検索結果はだいたいの傾向を知る手がかりであるに過ぎないが、「せこ」は茨城から西の地域に広く分布すると見てもいいだろう。ついでに述べておくと、類義の「さこ」を含む地名は全国に広く分布し、かつ中国、九州には高い密度で分布する。また、徳島県には小字地名も含めて「せこ」は無いようであり、「さこ」は山間地域に数多く見られる。

5 2　「狭い場所」の意の「せこ」の分布

ここであらためて、「狭い場所」の意の「せこ」の分布を確認しておこう。4 1に示した「せこ」は、次の地域に分布していた。

茨城県（東南部）、埼玉県秩父郡、長野県佐久、岐阜県大垣市・山県郡・稲葉郡、愛知県北設楽郡・愛知郡・碧海郡・豊橋市・日間賀島、滋賀県高島郡、奈良県宇陀郡、和歌山県日高郡・東牟婁郡・新宮、三重県、愛媛県、高知県、鹿児島県

この分布状況も方言集や方言辞典に採録された範囲でという限界があることを、おそらく十分に考慮すべきなのであろう。

5 3　「せこ」「せこ～」の分布から言えること

地名の「せこ」、普通名詞の「せこ」、「せこめる」や「せこためる」の分布を重ね合わせてみると、地名と普通名詞の間には明確な相関関係があるともいえないが、おおまかには茨城以西での

分布という点が共通すると言えなくもない。

「せこめる」は、どうやら周圏分布をするようだが、「せこためる」は「せこめる」の西側に分布し、「せこ」の分布とは重なっていない。

さて肝心の「せこい」との関係だが、一つだけ興味深い事実を指摘することができるかと思われる。それは、「苦しい」の意の「せこい」が今なお広く使われている徳島県には、「狭い場所」を表す「せこ」も、地名の「せこ」も確認できていないことである。

「苦しい」の意の「せこい」が、どの地域、どの集団から生まれたか、にわかには明らかにしがたいが、かつては四国に広く、そして岡山県西南部に分布していた「苦しい」の意の「せこい」が徳島県とその近辺にわずかに残る状況になったについては、右のような状況が関係するのかもしれない。

つまり、「狭い場所」へと連想を引き戻されるということがなかったのではないかということである。

6 「せこ」と「堰く」「咳く」「急く」

『角川古語大辞典』が、「堰く」「急く」の共通点として「余裕のなくなること」をあげ、「咳く」と併せて、「せ（狭）」と同根とし、『小学館古語大辞典』も特に根拠は挙げないが同様の見解を示している。

たしかに、「咳く」を「呼気を急激に吐こうとしていながら、息の流れがいったんは妨げられる状態を伴う動作」と捉え、「堰く」は「（水などの流れを）妨げる」と把握するならば、その共通の要因として、流体の流れる通路に余裕が無くなる状態を見ることはたやすい。「急く」も感情的に、さらには時間的に余裕の無い状態を表すと考えられる。したがって、「堰く」「咳く」「急く」の三者が共通の語根を持ち、それが狭いことを意味する「せ」であるとすることは当然認められる。

「せこい」の語根「せこ」についても、そこに「せ（狭）」を認めることができるのは3に示したとおりである。

7 方言「せこい」のまとめ

以上、述べてきたことをまとめておく。「せこい」は名詞「せこ（狭処）」または、それが状態言化した「せこ」を語根とする形容詞として成立した。その分布には、地名や普通名詞の「せこ」の存在が関係するかもしれない。成立の時期はよく分からないが意外に古くまでさかのぼることができるかもしれない。「せこい」は「余裕の無い状態」を表すという点で、「堰く」「咳く」「急く」と共通する。

附 俗語・隠語の「せこい」

一九七〇年頃から注目され始め、八〇年代の国語辞典類に採録されるようになった「けちくさい、みみっちい」の意の「せこい」は、『大辞林』によると「悪い、醜い、下手」の意味も「役者・寄席芸人の隠語から」とされている。『広辞苑』『大辞泉』後者についてのみ役者・芸人関係の隠語と認めているようである。しかし、前者が後者から派生してきたことは疑いないであろう。

その普及の経緯を詮索している余裕は今無いのだが、ひとつ気

にかかる点がある。それは、この類の「せこい」（これは形容動詞としての歴史を持つようである）の意味「悪い、……」が鎌倉時代の『名語記』に記された「いやしき物をせことなづく」に繋がるのではないかと思われることである。

『名語記』の「せこ」が、どのような背景を持つ言葉かは分からないが、既に「狭い場所」から離れて「いやしき物」を表すに至っているのか、あるいは「いやしき〈事〉」ではなくて「いやしき〈物〉」とされていることに注目すれば、この例は、「下品なこと。悪いこと」といった意味には当たらないのかもしれない。「せこふかす」の「せこ」なのかもしれない。更に検討が必要であろう。

方言、俗語、隠語それぞれの「せこい」がどこで生まれてどのような歴史をたどってきたかは、結局明らかにはならないかもしれないが、これらが統一的に説明可能かどうかについては、あらためて検討してみたい。

【注】

1. 山口幸洋は、『オサンドンという名の鳥』（一九九四年　近代文藝社）の中で、体言が形容詞化する例の一つとして、「セコイ（狭いところ「せこ」）」を挙げてある。ただし、どの意味の「せこい」かは述べられていない。
2. 明治三四（一九〇一）年ころに書かれたと思われる『阿波希ん奴』（「山坂ナドヲ登リテ気ノアヘグヲ――ト云フ」）をはじめとして、いちいちその名称は挙げないが徳島の方言辞典、各市町村誌に収められた方言集などに見ることができる。
3. 高橋謙志氏の調査などによる。高橋顕志『四国言語地図――一九九〇――』によると、「肉体的に苦しい」の分布は、徳島県の他は東予地方（川之江近辺）に集中的に、松山市近辺にわずか例外的に見られ、「精神的に苦しい」の方は、徳島県（主に吉野川流域）に分布する他は、松山市近辺に例外的に報告があるだけである。
4. 夕刊の投書欄「ちょっとええ話」は、一九九七年～二〇〇〇年を中心とする三七五日分、朝刊の投書欄「読者の手紙」は、同じく三三三日分から検索した。
5. 『日本方言大辞典』では、「いじめる。責める。問い詰める」の意の「せこめる」と同意の語として整理されており、肥後、島根、対馬の方言集に並び、『阿波』にも収録されているように書かれている。『阿波の國言葉』では、「せこめる　苛メル、責メ苦シメル」とある。
6. これは、国土地理院発行の二万五千分の一地形図、二十万分の一地勢図、および、旧陸軍参謀本部陸地測量部発行の五万分の一地形図を基本とし、一部は他の地図から補って、それらに記載された地名を全て収集し作成されているので、得られた検索結果には重複もあると考えなければならない。したがって、具体的な数は正確な状況を反映しているわけではないが、おおよその傾向は知ることができる。

【参考文献】

〈方言辞典・方言集〉本文中に言及したものに限る。
金沢治『改訂阿波言葉の辞典』昭和五一年　小山助学館
島田泉山『阿波希ん奴』明治三四年ころ以降（『徳島大学国語国文学』

第8号所収）
高田豊輝『徳島の方言』昭和六十年
中川三郎『坂出の方言』平成二年
橋本亀一『阿波の國言葉』昭和一四年（昭和五十年復刻）国書刊行会
平山輝男・上野和昭『徳島県のことば』平成九年　明治書院
『日本方言大辞典』一九八九年　小学館
《古語辞典・国語辞典》
『角川古語大辞典』　昭和六二年
『小学館古語大辞典』一九八三年　小学館
『時代別国語大辞典』室町編　一九九四年　三省堂
《言語地図等》
金井弘夫監修『地図で見る　日本地名索引』　アボック社　一九九八年
高橋顕志編『四国言語地図―一九九〇―』　高知女子大学文学部国語学研究室

（せんば・みつあき　総合科学部教授）